

ヒアリ等防除に関する専門家会合 議事概要

日 時：平成 29 年 7 月 27 日（木） 10:30～12:00

場 所：新宿御苑インフォメーションセンター 2 F レクチャールーム

専 門 家：

岸本 年郎	ふじのくに地球環境史ミュージアム准教授
五箇 公一	国立研究開発法人国立環境研究所生態リスク評価対策室長
辻 和希	琉球大学農学部・鹿児島大学大学院連合農学研究科教授
橋本 佳明	兵庫県立大学自然環境科学研究所准教授

（ ※ 五十音順、敬称略 ）

【議事概要】

<ヒアリ確認時の対応について>

- ・ヒアリが確認されたコンテナは、全て燻蒸するようにしてほしい。
- ・資料 2 では、薬剤に遅効性のフィプロニルを勧めているが、状況によっては即効性のものでよい。

<同定支援について>

- ・一度、実物を見ながら講習会を行えば同定できるようになる。自治体向けの同定講習会を行うための、共通の教材作成が必要。

<モニタリング調査について>

- ・調査範囲が半径 2 km でいいかを、検討する必要がある。
- ・荷揚げからコンテナを洗浄して戻すまでの過程で、どのような処理を挟むのか、検討が必要。特に使用後のコンテナを洗浄する業者が内陸にある。洗浄時に拡散させるおそれがあるため、そういう場所の周辺も確認した方がよい。
- ・今後、ヒアリの確認地点が増えると、関係者が疲弊する恐れがあるので、情報共有や効率的な見つけ方の検討が必要。
- ・8 月の暑い時期は、アリの日中活動も減りみづかりにくくなる。また、調査者も消耗するので、アリが出てくる時間・時期を待つ方が効率的。粘着トラップの活用も重要。
- ・夏よりも春と秋の方が定着の確率が高まると思う。モニタリングはその時期の方がよい。
- ・むやみにベイト剤を置くべきではない。未定着の段階で予防的に設置してし

まうと、在来アリへの影響の方が大きく、かえって外来種が定着しやすい環境をつくってしまう。現時点で生息が確認された地点に集中した方がよい。

<侵入防止対策について>

- ・ヒアリ汚染地域からのコンテナについては、積み込み時に荷物と一緒にベイト剤を入れてもらう対策をとれないか。
- ・今、世界のコンテナの多くは中国で製造されている。ヒアリの入らない、入りにくい構造に、コンテナの構造的な解決をするのであれば、そういうところと連携する事も考えられる。ただし、世界中のコンテナが入れ替わるには10年ぐらいはかかるので、息の長い取組になるが
- ・早期発見技術として、DNAで簡易同定（一次スクリーニング）できるLAMP法を開発中。8月中旬にはマニュアル化して、自治体に頒布できるようにしたい。

<定着の可能性と対策について>

- ・定着していた場合の対策についてはまだ検討されていない。海外事例を鵜呑みするのではなく、日本の環境特性を踏まえて検討を進めておく必要がある。
- ・定着可能範囲について、茨城県あたりまで生息できるという過去の分析があるが、開発が進んだ日本では、平野部であれば北海道でも定着する可能性はゼロではない。
- ・以前から中国から侵入が起きていて定着に至っていないのか、近年急増して定着するおそれがあるのか、リスク評価が必要。中国の個体群動態についての情報収集が必要。
- ・現在は、短期的対策が中心であるが、報道も含め、長期的観点で見てほしい。ヒアリ騒動で終わらせるのではなく、長期的なヒアリ対策と位置付けるべき。日本の外来種対策を推し進めるきっかけになればいけない。

<関係組織との連携について>

- ・定着した場合には農業等の産業にとって重要な害虫になる。今のうちから農林水産省も動いておくことが望ましい。
- ・外来生物法は比較的新しい法律のため、外来生物対策においては国と自治体との連携が不十分。指揮体系を整備するべきである。
- ・自治体の危機意識は高い。うまく連携を図るべきであり、また役割分担も課題となる。